

---

## 古代の皮革 1. 西南アジア

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

---

### 1. はじめに

日本が縄文時代であった紀元前4000年頃にはすでにメソポタミアでは文明が成立し始め、次いでエジプト、インド、中国にも成立し、これらが世界の四大文明と称されている。この時代人類は農耕と牧畜を営み、家畜の皮を衣類、武具、日用品および装飾品等に利用していた。皮の鞣しは当初単純な擦りや揉みなどの物理的処理により、その後、煙に燻した燻煙鞣しや油脂を用いた油鞣しが行われ、紀元前3000年頃より樹皮や実、葉等の植物タンニン鞣し、鉱物の明礬鞣しが行われるようになった。古代文明の遺跡には、刀剣の鞘、皮袋、車輪のタイヤ、履物、書写材料、紐や帯等の革製品ばかりでなく、壁画や絵画、文字も残っており、皮革の製造や利用がかなり明らかになった。

### 2. メソポタミア

チグリス川とユーフラテス川の流域のメソポタミア（二つの川の間という意味。現在のイラク）は古代文明が栄えた地域であった。紀元前4000年頃この地に定住したシュメール人が前3000年頃から人類最初の都市国家を築き、楔形文字くさびがたを発明し、それを粘土板に記した。その後、いくつもの遊牧民族が侵入し、アッカド王朝、バビロン王朝、ヒッタイト王国、ミタンニ王国と続き、前2000年頃アッシリア人がアッ

シュールという都市を建設し、前740年頃から帝国時代となり、バビロニアやイスラエルを征服し、前670年にはエジプトを征服してオリエントを統一した。シュメール時代（前3000～2300年頃）の南部の都市国家ウルの王墓からは、金や宝石で装飾された調度品と共に紐や車輪の残欠が発掘されており、それらは皮の線維構造を有していたことから革製品であることが明らかである<sup>12)</sup>。またそれらに白い粉末が混ざっていたことから、明礬鞣しが推定される。一方、没食子（地中海沿岸で多く産するブナ科の若枝に生じた虫瘤）で鞣した革の場合は白い粉末は残っていない。またレリーフには羊皮のスカートを穿いた人物やロバやラバに引かせた二輪車が描かれており、その座席は豹の皮で覆われていた。イラク中部のキシユの王墓では、木製の円盤の周りに革を巻き銅鉾で留めつけた四輪車が出土した。この時代は輪が軸に固定され両者が同時に回転した。また宮殿の発掘により、牧畜や皮革製造を示すレリーフや円筒印章、祭祀用の壺、文書記録が明らかになっている<sup>3)</sup>。バビロニアやアッシリアの楔形文字や絵画は、皮革製造に油や乳、麦粉、明礬、没食子、ビール、ワイン、植物性香料の使用を示している。牛、ロバ、ラバおよび羊の革の靴やサンダルの履物、水やワイン、塩などを入れる袋、短剣や剃刀の鞘等が製造されていた（図1）<sup>1)</sup>。さらに革は軍隊



図1 アッシリアのサンダルと編み上げ靴<sup>1)</sup>

の装備品としての甲冑、矢筒、楯および馬具等の重要な材料でもあった。このことは大英博物館やルーブル美術館のレリーフからも知ることができる<sup>4)</sup>。エジプトにはナイルの水運のためにパピルス（パピルス草すなわちカヤツリ草の茎から製した紙）舟があったと推定されるが、メソポタミアではパピルスが無かったこともあって、動物の皮を浮袋として、また枝編細工の組枠に張り巡らし舟として利用した<sup>5)</sup>。ひと昔前には、中国の黄河上流域やチベットのヤルツァンボ川で羊皮の袋を数個並べた筏やヤクの皮の舟が使用されていた<sup>6)</sup>。

### 3. 小アジア

紀元前2000年頃ヒッタイト人が地中海と黒海に挟まれた西アジア半島の小アジア（現在のトルコの大部分）に侵入し、紀元前15-12世紀に繁栄した。アナトリア高原のアリシャル（ヨズガトの南東30 km）の遺跡から、皮革の遺物としては最古のものとされる紀元前2800年頃の小さな遺体を包んだ革片が発見されたが、発掘直後に崩壊した<sup>7)</sup>。つい最近ロイター通信がトルコ国境近くのアルメニアの洞窟で世界最古の牛革靴（前3500年頃）がほぼ完全な形で発見されたと報じている（北海道新聞2010.6.10夕）。キュルテペ（カイセリの北東約20 km）やアリシャル、ボガズキョイ（古代名ハットウシャシュ）の遺跡から出土した

楔形文字を刻んだ粘土板は明礬と没食子が鞣しに利用されたことを記している。古代民族のヒッタイトが栄えた頃（前2000年頃）のシリアの岩のレリーフに、とんがり帽子や先の尖った靴、長靴を身に付けた絵が描かれている<sup>1)</sup>。小アジアの土地はアルカリ性のため、革の保存には適さなく、遺物はほとんど無いが、靴の外観はキュルテペから出土した嘴のような爪先が上向いた靴を真似た粘土の飲用器からも想像できる（図2）<sup>7)</sup>。この型の靴はマラシ地方では現在でも伝統的なものとされている。またトロイ（小アジアの古代都市 前2000年代）の発掘では、金や銀の装飾品の容器中に細かい白あるいは薄い青粉末が存在しており、これは装飾品に供されたサックあるいはケースの残欠であると推定される。小アジアにおける製革業はメソポタミアと同様に古くから発展しており、これらの地域は上質の革の発祥地であり、その革は後にヨーロッパに伝わったと言われる<sup>8)</sup>。北メソポタミア・シリアのミタンニ王国のトゥシェラッタ王が紀元前1400年頃エジプトのアメンホテプ三世に羊革の靴を贈ったことは確からしい<sup>1)</sup>。



図2 粘土製飲用器  
トルコ、キュルテペ出土（B.C.19世紀）<sup>7)</sup>

小アジアにおいても、脱毛しただけで鞣されていない皮が太鼓に利用されていたが、古代エジプト王プトレマイオスのパピルスの輸出禁止により、紀元前2世紀のオ

イメネス二世王の時に小アジア北西のイズミルの近くの都市ペルガモン（現在のベルガマ）で、書写材料として上質の羊皮紙が製造され、その地名に因んで“パーチメント parchment”、“ペルガメント Pergament”（ラテン語 carta pergamena）と称されて普及した<sup>19)</sup>。ペルガモンはギリシャ文化の融合したヘレニズム都市であり、建築、美術、学問および産業において発達していた。バビロニア人は脱毛して削っただけの羊や山羊の皮に文字を書いており、後のバビロニアやアッシリア特にアラムにおいて、アラム語が普及し、羊皮紙に記されるようになり、1世紀中以降には粘土板は作られなくなった。なお、中央アジアのミンフォン（ニヤ）において、長方形の羊皮に書かれた4世紀頃の公文書が発見されている<sup>10)</sup>。

#### 4. イスラエル

ヘブライ人（イスラエル人）は紀元前1500年頃パレスチナに定住し、その一部がエジプトへ移住したが、紀元前1200年頃エジプトで圧迫され、モーゼに引き連れられてパレスチナに戻ってきた。その中に、エジプトで発達した製革技術を身に付けた人もいたことが想像される。紀元前4世紀頃以降の旧約聖書に、衣服、皮紐、革靴、サンダル、革袋、幕屋の外側および聖堂の屋根の覆い等の使用が示されているが、その革の製造法については記述されていない<sup>4)</sup>。しかし“I am become like a bottle in the smoke.”という文句があるが、これは山羊の皮の容器（皮袋）を煙で燻して製造したことを意味している<sup>11)</sup>。2世紀頃にできた新約聖書には、“else the new wine doth burst the bottles”「新しい酒は古い皮袋に盛るな」という格言もある。ユダヤ人の律法学者の口伝、解説であるタルムードにおいて、皮革製造に犬や豚の糞を用いたこと

が書かれている<sup>411)</sup>。これらの糞は発酵により皮の主要成分であるコラーゲンタンパク質以外の成分を除去し、コラーゲン線維をほぐし、革の柔軟性や平滑性を高める。動物や鶏、鳩の糞を用いたベーチング（酵<sup>こ</sup>解<sup>かい</sup>）は牛や豚のすい臓から得られたベーチング剤が開発される20世紀初めまでは世界中で行われていた。

#### 5. ペルシア

アッシリア滅亡（紀元前712年）後、再びオリエントを統一したペルシア（現在のイラン）においても、革製の靴、甲、鎧および馬具が製造されていた。サフランで染色された靴やスリッパが好まれ、さらにそれらに宝石などの装飾も施した<sup>4)</sup>。ルーブル美術館に収蔵されているアケメネス朝時代（前500年頃）のスーサ（南西部のホジスターン地方の遺跡）のダレイオス一世（在位前522～486）宮殿の「ペルシャ人近衛兵装飾壁」に、編み上げ靴を履き、革製の矢筒を担いだ兵士（反対向きのもある）が描かれている（図3）<sup>1)</sup>。ダレイオス一世の時代は領土が最大となり、東は中央アジア、インダス川流域から、西はマケドニア、エ



図3 ペルシャ人近衛兵装飾壁  
イラン、スーサ出土（B.C.世紀頃）<sup>1)</sup>

チオピアにまで及び、その属州から全部で23の民族からなる朝貢使節団が新年(ノー・ルーズ)すなわち春分の日に行列し、王や貴族の観閲を受けた。この様子が国都のペルセポリス王宮の謁見殿基壇側壁に浮彫りされている<sup>12)</sup>。ソクディアナ人(アラコシア人?)とキリキア人のそれぞれ毛皮と革が貢納物として描かれており(図4)、毛皮は浮彫りが破壊されており、全体像が不明であるが、尾の形からライオンのものと思われる。パルティア人(アリア人?)も皮を持参したと書かれている。アッシリア人(ガンダーラ人?)のサンダル、ペルシア人とメディア人の腰に下げている袋は革製と見られる。さらに宮殿の階段側壁には給仕人が酒袋と仔鹿、料理の容器を持っているのが描かれている。

パキスタン出土の2~3世紀頃のクシャーナ朝時代の饗宴図浮彫(ディオニュソス神とアリアドネ)には、皮の酒袋を肩に担いでいる男が描かれていた<sup>12)</sup>。

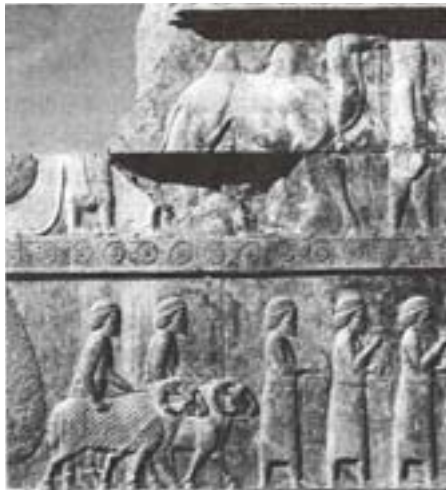


図4 ノー・ルーズ大祭に参集した朝貢行列の浮彫り  
イラン、ペルセポリス (B.C.5世紀頃)<sup>12)</sup>

## 文 献

- 1) Körner, T. : "Handbuch der Gerbereichemie und Lederfabrikation", I -1, (Grassman,W., Hg), Springer-Verlag, Wein (1944) P. 1.
- 2) Körner, T. : Collegium, 348 (1932) .
- 3) 吉村作治編：“メソポタミア”, Newtonアーキオ, 4, ニュートンプレス (1998) P. 89.
- 4) Kobert, R. : "Beitrager zur Geschichte des Gerbens und der Adstringentien", Verlag von F. C.W.Vogel, Leipzig (1917) P. 9.
- 5) 神山峻：“水産皮革”, 水産経済研究所 (1943) P. 5.
- 6) 天理参考館：天理参考館常設展示図録 (2001) P. 36.
- 7) Gerngross, O. : Das Leder, 6, 33(1955).
- 8) Watt, A. : "Leather Manufacture" , Crosby Lockwood and Son, London (1919) P. 1.
- 9) Watt, A. : "Leather Manufacture" , Crosby Lockwood and Son, London (1919) P. 437.
- 10) Waterer, J. W. : "A history of Technology" , The Clarendon press, Oxford (1956) P.147.
- 11) 沢山智：“毛皮 鞣製・染色・鑑定・保存法”, 成美堂 (1933) P. 1.
- 12) 講談社出版研究所編：“世界の聖域 2, ペルシャの聖都”, 講談社 (1980) P. 73.